

「戦時下における児童文化」について（その五）

——「東日小学生新聞」の「紙上作品展覧会」における位相と展開（五）——

熊木 哲

前稿へ「戦時下における児童文化」について（その四）ⅴ（大妻女子大学紀要・文系）第三十一号、一九九九・三）では、「東日小学生新聞」の「紙上作品展覧会」における位相と展開に関して、昭和十三年（一九三八）の第四四半期（十月～十二月）を検討してきた。

昭和十三年は、「国家総動員法」が四月一日に公布（五月五日施行）され、同月七日、徐州作戦を開始。「大本営陸軍部」の発表では、七月七日の「支那事変一周年」までに、戦線は、南は杭州附近から安慶、潜山、正陽関、拓城、開封を経て山西省境に及び、その全長は約二千二百五十キロ。占領した面積は百二十四万九千平方キロで、「わが国土の二倍弱」に相当し、一方、「わが軍の戦死は三万六千六百二十九人」（「東日小学生新聞」七月八日・第五五八号）。

昭和十三年第二、三四半期になって、作品に「英霊」や「遺骨」や「名誉の戦死」が現われるのも、こうした戦況があつたことであるのは、いうまでもない。しかし、この時期、「英霊」や「遺骨」や「名誉の戦死」を内容とする作品は数的には多くはなかった。このことは、投稿された作品が少なかったからであろうか。多くの読者の家庭では、この時期、未だ大陸での戦線の拡大、長期化という戦況の影響が顕著でなかったということなのであろうか。この推測の当否は別として、掲載された作品が少なかったということだけは事実であった。

さて、昭和十三年第四四半期における「児童文化」の展開について

の特徴は、「紙上作品展覧会」欄（以下、適宜「欄」と記す）の設定そのものが極端に少なくなつてしまつていたということであつた。しかし、「欄」の設定はないものの、日曜日毎に作品は掲載され、その数が激減したということではなかった。

内容的には、この第四四半期においても、父や兄が出征し、兄が戦死したという「綴方」を見るところとなつた。この期における軍事的な動向は、十月の広東・武漢三鎮への作戦があつたが、日常化した「戦時下」にあつて、肉親の戦死は避けられない現実として児童たちの前に立ち現われたということであろう。

投稿作品のうち、「戦時下」故の内容を顕著に示したものは「短歌」であつた。「征きし兄身は戦場の露となりしも」のほか、平日掲載の九首の「戦時下」関連作品のうち、投稿者の児童と繋がりのある人が詠まれていると推定される作品が六首。この数は第二、三四半期と比較した時、大きいことも検証した。

一方、「詩」と「俳句」作品においては、平日の作品も視野に入れて検討してきたが、「綴方」に見られた出征の見送り、帰還兵・遺骨迎えなど、戦場へ直結した内容をもつ作品は見られなかった。

また、「書方」では総じて第四四半期の季節柄の字句が目立ち、「図画」では、身近な風景を描いたものが多く見られた。「戦時下」色が薄かつたと言えようか。

しかし、この第四四半期での「戦時下における児童文化」を代表する作品は、「おうちの前を出征する兵たいさんが、汽車に乗って通る」「はんたいの方には、がいせん兵やおこつやきずついた兵たいさんなどの汽車が通る」という「綴方」の「兵隊さんの汽車」だ。この作品は、第四四半期、「銃後」の児童の身の上に「戦時下」が広く覆い被さって来たということを如実に示した作品であったといえよう。

以下、本稿では、昭和十四年（一九三九）の第一四半期（一月～三月）の検討を試みる。「紙上作品展覧会」以外の作品、すなわち日曜日以外に掲載された作品も適宜とりあげる。引用に際しては、「書方」以外は旧字体を新字体に改めた。なお、在籍校名は原則として掲載によつたが尋常高等小学校を指す「尋高」は省略し、在学年次のうち高等科は「高一」などとした。また、投稿者氏名も省略した。

一 昭和十四年第一四半期の展開

第一四半期、一、二、三月を併せて検討するが、この時期、確認できた「紙上作品展覧会」欄はわずかに二回のみ。

第一四半期の検討対象である日曜日は一月一日から三月二十六日までの十三回。前年（昭和十三年）の第二、第三、第四四半期と同じであるが、一月一日（第七一〇号）は国会図書館蔵のマイクロフィルム資料では第五面以後はへ欠けであり、掲載有無の確認が不可能。また、日曜特集の八面建て紙面構成であっても、「紙上作品展覧会」欄はもとより作品の掲載がないのが三回（一月十五日・第七二二号、三月十九日・第七七五号、同二十六日・第七八一号）ある。

従って、検討対象は九回の日曜分となるが、副題にいう「紙上作品展覧会」欄の設定されたのは、二月二十六日（第七五七号）と三月十二日（第七六九号）の二回のみであり、これだけでは作品数が余りにも少ないので、以下では、前稿同様、「紙上作品展覧会」の見出しのない日曜日の作品も検討対象とする。なお、「紙上作品展覧会」欄の

減少傾向については、前稿でも触れておいたのでここでは繰り返さない。

ただし、前年の第四四半期において「紙上作品展覧会」の見出しを持つていた二回は、全面掲載ではなく、上三段には「童話」や「日曜手工」が置かれ、下七段の使用となっていたが、この昭和十四年第一四半期の二回の「紙上作品展覧会」は全面掲載となっている。

また、欄見出しもなく、紙面構成でも全紙ではなく部分使用となっているものの、「綴方」「詩」「書方」「図画」を掲載した一月二十九日（第七三三三号）、「綴方」「詩」「短歌」「俳句」「書方」を掲載した二月十二日（第七四五号）など、作品構成では「欄」に準じたものが見られた。

更に、二月二十六日には、「紙上作品展覧会」欄が第六面に設定され、第七面にも「詩」と「書方」が掲載された。

一方、「綴方」と「詩」がそれぞれ一篇ずつのみ掲載されたのが、一月八日（第七一五号）、一月二十二日（第七二七号）。「綴方」一篇と「詩」二篇のみの掲載が二月十九日（第七五一号）、「綴方」と「詩」が一篇ずつで、「短歌」が二首のみの掲載が三月五日（第七六三三号）。

欄見出しのある二回にしても、二月二十六日は「紙上作品展」であり、三月十二日は「紙上作品展覧会」であり、統一性はない。

従って、以上の事から、この第一四半期での作品掲載はその展開にバランスを欠いていると言わざるを得ない。

それは、以下に見るように、作品のジャンル別の掲載でも同様である。

「綴方」は、一月八日（第七一五号）、同二十二日（第七二七号）、同二十九日（第七三三三号）、二月五日（第七三九号）、同十二日（第七四五号）、同十九日（第七五一号）、三月五日（第七六三三号）に各一篇。二月二十六日（第七五七号）と三月十二日（第七六九号）に二篇。すなわち、「欄」の設定された場合に二篇の掲載で、それ以外の日曜日は各一篇の掲載で合計一作品。

なお、前年昭和十三年第一四半期に二三篇、同第二四半期に一二篇、同第三四半期に一三篇、同第四四半期では一六篇であった。しかし、この前年の第四四半期における「紙上作品展覧会」の見出しを持っていた二回は、全面掲載ではなく、下七段の使用であるにもかかわらず一六篇の掲載であり、十四年第一四半期の二回の「紙上作品展覧会」が全面掲載であっても一篇に留まっていることからみると、作品の長短はあるにしても、十四年第一四半期における「綴方」の掲載作品数は少ないといえよう。

「詩」は、一月八日、同二十二日、二月五日、同十二日、三月五日に各一篇。一月二十九日、二月十九日に各二篇。二月二十六日には、第六面の「欄」に「詩」二篇のほか「童謡」一篇が掲載され、この「童謡」を「詩」のジャンルに入れると三篇となり、第七面にも二篇。他に三月十二日に三篇が掲載され、合計一七作品。

前年昭和十三年の「詩」作品の展開は、第一四半期二二篇、第二四半期二〇篇、第三四半期一〇篇、第四四半期一六篇であった。従って、十四年第一四半期における「詩」作品の掲載数は少なくないといえよう。

「短歌」は、一月の三回の日曜日には掲載がなく、二月十二日に六首、同二十六日に三首、三月五日に二首。合計で一一首。

前年昭和十三年の「短歌」作品の掲載は、第一四半期には三五首、第二四半期では二三首、第三四半期では一六首、第四四半期では二二首であった。従って、十三年は次第に減少傾向が見られたが、十四年第一四半期は更に減少したということになる。

「俳句」は、検討対象の全九回の日曜日のうち、二月十二日に三句のみの掲載。

前年昭和十三年の「俳句」作品の掲載は、第一四半期では四三句、第二四半期では三六句、第三四半期では二二句、第四四半期では一六句であり、ここにも「短歌」同様減少傾向が見られたが、十四年第一四半期に至っては激減したと言わざるを得ない。

「書方」は、一月二十九日に五点、二月五日に四点、同十二日に二点、十九日に二点同二十六日の第六面の「欄」に二点、第七面に三点、三月十二日に八点。合計三六作品。前年昭和十三年の「書方」作品の掲載は、第一四半期一四八作品、第二四半期一〇一作品、第三四半期四五作品、第四四半期に五八作品であった。「俳句」ほどではないにしても、十四年第一四半期における掲載数の減少は明らかである。

「図画」は、一月二十九日に二点、二月二十六日に五点、三月十二日に六本の掲載があるのみで、合計一三作品。

前年昭和十三年の「図画」作品の掲載は、第一四半期では八一作品、第二四半期では六七作品、第三四半期では二七作品、第四四半期には一九作品。言うまでもなく、十四年第一四半期における掲載数の減少は明らかであるが、単に掲載点数の減少ということのみならず、掲載機会も少ない。前年第四四半期には、一九の作品が七回に渡って掲載されていたが、この十四年の第一四半期では月一回ずつの合計三回にすぎないのである。

このように、昭和十四年第一四半期における作品展開を直前期である十三年第四四半期と数量的に比較した場合、「詩」作品を除いて、ほかはすべて減少傾向にあった。

前年の昭和十三年の前半期と後半期の掲載作品数を比較すると、後半の半年間での掲載数は明らかに減少しており、その原因は「紙上作品展覧会」欄の設定が、十三年の前半期で二回あったものが、後半期では五回にすぎないという事情によるものであった。

では、昭和十四年第一四半期における作品展開を直前期である十三年第四四半期と比較してみると、「欄」の設定は同じ二回であるのに、掲載作品数では「詩」作品以外はすべて減少している原因はとなると、作品の長短ではない。それは、十三年第四四半期の検討対象が二三週あるのに対して、十四年の第一四半期は、前述したように九週しかないということである。検討対象の二三週のうち、マイクログ資料(欠)

の一月一日を除いたとしても、「欄」の設定のみならず作品の掲載さえもない週が三回もあったことが掲載作品数の減少をもたらしたことは明白である。

こうした「欄」の設定のみならず作品の掲載さえもない編集意図を推測することにどれほどの意味があるか不明ではあるが、その意図には「欄」設定が激減した背景に通じるものがあるのではないであろうか。つまり、平日における作品掲載が定着し、日曜日ごとに「欄」を設定する必要がなくなったことの延長線上にその理由が求められようである。

二 昭和十四年第一四半期における「綴方」

「綴方」の掲載作品は、合計一作品。内訳は、次の通り。

「非常時」(北海道幌別郡幌別尋高校四年女子、

一月八日・第七一五号)

「井戸」(千葉県君津郡竹岡校五年女子、

一月二十二日・第七二七号)

「自転車のけいこ」(東京市世田谷区和光学園四年女子、

一月二十九日・第七三三号)

「かへり道」(茨城県那賀郡中野校四年女子、

二月五日・第七三九号)

「弟のおそ起き」(静岡県引佐郡都田校四年男子、

二月十二日・第七四五号)

「うちのマル」(群馬県勢多郡芳賀校五年女子、

二月十九日・第七五一号)

「思出」(千葉県君津郡竹岡校五年女子、

二月二十六日・第七五七号)

「涙」(福島県石城郡大浦校五年女子、同右)

「書方が紙上に出る迄」(東京府下小平第一校高二男子、

三月五日・第七六三号)

「全快した友」(茨城県鹿島郡若松西校六年女子、

三月十二日・第七六九号)

「すまふ」(埼玉県男子師範附属校四年男子、同右)

さて、「非常時」(一月八日、第七一五号)は次のような作品である。

此の間の晩である。お母さんが、「節子にユタンポを買ってやらなければならぬわね。」とおつしやつたので、私は、「非常時よ。だからいらぬわ。」と言ふと、お母さんは、何か思ひついたやうに手をた、いて、「あ、い、ものがある。石をあた、めて、入れてやらう。」とおつしやつた。政敏までまねをして、「あたしにも入れて。」と言つたので、お母さんは、だまつて居られた。

となりの家では、とうきみを一心にもいで居る音が、かべを通りて聞えて来る。

とうきみをもいだあと、非常時だから木の代り、とうきみのからをくべて居る。

昨日家でもたくさんもらつた。お母さんは、「木をこれだけいたたら、箱にいつばいなのに、からをたいたからこれだけあまつた。」と一人言のやうにおつしやつた。

私は、ほんたうに何事も節約して、この非常時を送らなくてはならぬと思つた。

作者は尋常小学校四年生。多少、判り難い点はあるものの、年齢からすれば立派な作品である。この文面からは、北海道の厳しい冬の寒さにもかかわらず、「非常時」だから「ユタンポ」を我慢するという健気さが伝わってくるが、「非常時」は厳寒にいる児童に我慢を強いるものであり、「非常時だから」と児童に自戒させる大人の論理が児童の冬を一層厳しいものにしてている。

前々稿(その三)において触れたが、中国大陸での戦線の拡大、長期化にともなう、昭和十三年の第三四半期には、児童に「がまん」が求められている様子が覗かれる作品が掲載せられていた。

戦線の皇軍思へば暑き日も何のこれしきとがまんするかな

十三年八月二十日(第五九五号)に掲載された豊島区長崎第二校四年生男子の「短歌」であるが、「綴方」作品「非常時」には、この「短歌」に見られる精神的な「がまん」の側面もあるが、その背景には物資の統制が児童の日常生活にまで「がまん」を求めていたといえようか。

政府は、軍需資材の供給確保のため、民需物資への使用制限を実施し、昭和十三年四月二十五日公布の商工省令「銃鉄鋳物製造に関する件」に次いで、同年七月八日には「鋼製品の製造制限に関する件」が公布され、フォーク・スプーンをはじめ湯タンポや鳥籠など多くの製品がその対象とされた(山中恒「欲シガリマセン勝メテハ」辺境社、一九七九・一所収)。「ユタンポ」を「非常時」故に我慢をするというのは、こうした物資統制が児童の心情にまで及んでいたということの一例といえようか。

「非常時」という用語は、既に昭和十三年二月二十日(第四四〇号)掲載の「綴方」作品「資源愛護」(新潟県見附校六年女子)の一節に「この非常時日本の国に」として見えており、また、同年十一月六日(第六六二号)に掲載された「綴方」作品「父の渡米」(神奈川県茅ヶ崎第二校五年男子)の一節としても見えていた。更に、同十一月十八日(第六七二号)には「非常時や駅を埋める旗の波」(王子区赤羽校五年男子)の「俳句」が掲載されていたことはこれまでに確認した(その二、その四)。

十四年第一四半期でも、日曜日以外に掲載された作品に、次のような「短歌」(福島県長瀬校高一女子、二月一日・水、第七三五号)が

ある。

非常時に米の豊作願かけて我が村人の祈る心よ

これらの作品に「受持」の教師や編集者の手が入っているであろうとの推測を排除することは出来ないにしても、この「非常時」という用語が児童の身近にあったと推測することは可能では無からうか。勿論、自発的ではなく強制的に馴染ませられたのであるが。

「非常時」は言うまでもなく「戦時下」であるが、この昭和十四年第一四半期における戦況は、前年十月二十七日の武漢三鎮占領後の比較的落ち着いた状況にあった。十三年十二月六日、陸軍省と参謀本部は「漢口広東攻略ヲ以テ武力行使ニ一期ヲ画シ爾後自主的ニ新支那ノ建設ヲ指導シ殊ニ躁急ヲ戒ム 之力為当分ノ内其基礎作業タル治安ノ恢復ヲ第一義」(『戦史叢書』8)とする「昭和十三年秋以降対支処理方策」を決定し、戦略的な大作戦は終り、占領地の確保に移るとした(『講談社』『昭和』5、平成元・一一)。

一方、国内では、十四年年明け早々の一月四日、第一次近衛内閣は総辞職。五日、平沼騏一郎内閣となり、この平沼内閣は二月九日「国民精神総動員強化方策」を臨時閣議で決定し、総動員体制の強化に乗りだした。「銃後」における「戦時下」は一層の「戦時」色を濃くしていった。

大陸では「漢口広東攻略ヲ以テ武力行使ニ一期ヲ画シ」たとしても、児童の身近における「戦時下」が無くなったわけでは、勿論ない。日曜日以外の「綴方」作品を見ても。

「出征家族の人たちは、元日まわりの帰りか」と記したのは「元旦の朝」(山形県南村山郡上ノ山校六年女子。一月六日・金、第七一三号)。

出征した先生へ宛てた「せんちの先生」(山形県南村山郡堀田第一尋高校二年男子、一月十日・火、第七一六号)。

「をちさんの入営」(福島県若松第三校四年男子。一月十八日・水、第七二三号)は、文字通りの内容。この作品には、「昨日まで頭の毛をのばしていらつしやつたが、今朝はくりくりぼうず」の「をちさん」が「御赤飯をおいしさうにたべて」いる様子や見送りに行く「近所の人や親るゐの人がぎつしりになつて、酒をのんだり、くるみや、豆えびなどをたべたりして、大にぎやか」な様子が描かれている。「僕」の「父がをちさんに」、「家でも楽隊をたのむとよかつたな」というと、「時節から楽隊なんかいらね」と叱える「をちさん」も描かれ、この時期での入営風景が観られる。

すでに戦地にいる兄に送る干し柿をつくっているのは「戦地の兄さん」(山梨県宮谷校六年男子、一月二十七日・金、第七三二号)。

入営を間近に控えた兄の帰宅を待つ「兄を待つ」(茨城県若松東校六年女子、二月七日・火、第七一四号)。入営は「一月十日工兵連隊」だ。

「僕は毎日父さんの武運長久をいのつてゐる」のは「武運長久」(群馬県桐生市昭和校三年男子、二月十八日・土、第七一五号)。

三月の日曜日以外に掲載された作品には、児童の身近な人の入営、出征などは現れてはいない。第一四半期の日曜日掲載作品では「非常時」一篇のみが「戦時下」故の作品であったが、以上挙げたように、日曜日以外の「綴方」作品に見られるように、多くの児童たちが将に「戦時下」に置かれていた。

また、直接に投稿した児童の身内に関するものではないが、前年の「漢口広東攻略」作戦の結果と推測されるのは「ゐこつ迎へ」(福島県会津若松第三校四年男子、三月二十二日・火、第七七六号)。

ボーボーと、けいさつのさいれんがなつた。いままでべちやくちやおしやべりしていた僕達は、一せいに、もくたうをした。道を通つてる人も、立止まつてもくたうをさ、げてる。やがて、さいれんがやむ。公会だうの前にせいれつする。や、時間がたつ

た。あきた僕達は、ふた、びれつがみだれた。遠くのほうからラツパの音が聞えてくる。「せい列。」と先生の声。皆はそろつた。ラツパの音が静かに、ごく静かに聞える。けん兵が馬に乗つて左右についてる。馬のひづめの音がばかと聞える。馬もかなしいのか、くびをたれてる。花わが行く。きれいなばかりだ。ラツパをふく兵隊さんのかほは、はりきれそうであせがびつしりだ。ラツパをふいてゐない兵隊さんは、鉄砲をさかささげてる。兵隊さんが、白いきれを首にかけてうなだれながらあるいてきた。百十一のゐこつを、二列にならべてくるのだから長い。先生が「けいれい。」と言はれた。長い長い列も終つたが、そのうしろからゐ家ぞくの人達がうつ向きかげんに、もんつきをきて、かなしうなほをしていらつしやる。しかし心の中では、よくやつてくれたと思つていらつしやるだらうとかんがへた。僕は思はず、「ありがたうございました。」と心の中でおがんだ。

長い引用となつたが、「ゐこつ迎へ」の様子が判る。「四年男子」の作品であるが、平仮名が多用されていることが年相応といったところで、内容も文体も年相応とは言い難い印象を持つが、ここで重要なのは、児童が「ゐこつ迎へ」に動員されていることと、その児童が迎えた「ゐこつ」が「百十一」であるということである。

前年暮には「短歌」に、「戦死者の遺骨迎ふる停車場に心つつましく我は待ち居り」(宮城県津山校五年男子、昭和十三年十二月十一日、第六九二号)の作品があつた。また、「俳句」にも、「遺骨をば迎えて涙新なり」(茨城県隆郷校高二女子、昭和十三年八月十六日、第五九一号)や「幼い子父の遺骨に旗をふる」(千葉県大和田校六年男子、同九月十四日、第六一六号)という作品があつたことは本稿冒頭部でも触れた。「ゐこつ迎へ」では遺族は遺骨の後について行列して進んでいったとあるが、これらの「俳句」に共通する光景も想定できよう。「百十一」の遺骨迎へとあるが、一集落或いは一村でのことである

うか。一つの地域での規模であり、遺骨に従った「お家ぞくの人達」の中にも少なからずの児童がいたことも可能性としては低くはなからう。「漢口広東攻略」による提灯行列の一方で「お家ぞくの人達」の一員であったり、「おこつ迎へ」で「ぎょうれつ」をさせられたのも児童たちであった。

三 昭和十四年第一四半期における「詩」「短歌」「俳句」

「詩」の掲載数は、合計一七作品。内訳は、次の通り。

「ひわ」(茨城県日立第四校三年女子、一月八日・第七一五号)

「古物屋」(茨城県若松東校三年男子、一月二十二日・第七二七号)

「氷」(茨城県若松東校三年男子、一月二十九日・七三三号)

「雪の夜」(北海道松前郡大沢校五年男子、同右)

「つるし柿」(山形県堀田第一校五年女子、二月五日・第七三九号)

「戦車」(静岡県沼津第四校四年男子、二月十二日・第七四五号)

「今朝」(神奈川県茅ヶ崎第二校五年男子、

二月十九日・第七五一号)

「下敷」(船橋市八栄校五年女子、同右)

「けんくわ」(茨城県日立第四校三年男子、

二月二十六日・第七五七号)

「かんでん」(沼津市第四校四年男子、同右)

「雪」(童謡・山梨県北都留*不明村沢松校四年女子、同右)

「考査の時間」(東京市中延校五年女子、同右)

「梅の花」(茨城県鹿島郡若松東校三年女子、同右)

「奥村さん」(横浜市稲荷台校四年女子、三月五日・第七六三号)

「シーソー」(茨城県日立第四校四年女子、

三月十二日・第七六九号)

「寒稽古」(静岡県沼津市第四校高一男子、同右)

「お日様」(神奈川県茅ヶ崎第二校五年男子、同右)

右のうち「古物屋」と「氷」は同じ児童の作品だが、一つずつある「沼津市第四校男子」と「茅ヶ崎第二校五年男子」はそれぞれ別人。このうち、時局柄を反映したものとしては、「戦車」のみであり、それ以外は児童の日常的な身近風景が題材となっている。

ハアーツ、ハアーツと息をはく、びつくりするほど白い息だ。
なんて今朝はひどい寒さだ。
うでぐみをしたまんま、背戸に出る。

こち／＼と、氷つた道は、つるりつるりと、あぶない。

竹やぶのすゞめが、しんとして鳴かない みんな寒いもんだから、
物置小屋の屋根から氷のあめん棒が、ずらつと、ぶらさがつてる。

茅ヶ崎第二校五年男子の「今朝」という作品。冬を身体的に捉らえ、エスプリの利いた出来栄え。今朝の「ひどい寒さ」を息を吐いて試してみよう。いつもと違って「びつくりするほど白」く見える。寒いはずだ、と得心する。時代を超えた感覚だ。あんまり寒いから雀も鳴かないという。なんだか納得させられる一節だ。

「氷」「雪の夜」「つるし柿」「寒稽古」、それぞれが冬の季節を自分の皮膚感覚で、あるいは視覚的、聴覚的に捉らえた作品である。友達顔の「かつちやいた」という「けんくわ」。相撲で兄を負かし得意になっている「すまう」。日常の出来事が「詩」となる。児童の日常そのものが「詩」そのものだといえ、あまりに「詩」的にすぎようか。

こうした児童の日常に「戦車」が入り込んできた。

第四へ戦車が来た。

戦車が動くたびに地面がほれる。
僕ものりたくなつちやつた。

向かうへ行く時ついて行つたら

がちやんがちやん

うるさかつた。

みんながぞろ／＼

ついで行つた。

沼津市第四校四年男子の作品「戦車」(二月十二日)。小学校の校庭に戦車がやってきた時の光景だ。少年戦車兵が創設され、その募集が始まるのは、この年の七月十五日。満十五歳から十八歳の少年が対象とされたが、そのデモンストレーションではあるまい。

前年の十一月二十五日(金・第六七八号)に、同じ「詩」作品として、同名の「戦車」(福島県安達郡二本松第二校四年男子)が掲載されていた。こちらは、下校時に「すごい音をたてて進んで来た」戦車が、砂利路をほつて人通の中を進んで行く」というものであった。「僕」の通学路に戦車が現われ、「人進の中を進んで行く」光景こそが「戦時下」なのであろうが、戦車は通学路ではなく小学校の校庭を走り回っている。校庭に戦車を乗り入れる意図はどのようなものであったのだろうか。

「東日小学生新聞」は、十四年一月十日(火・第七一六号)の第二面に「武勲の戦車、靖国神社へ 軍神の母がなつかしい対面」とする記事を写真とともに掲載した。

「昭和の軍神」西住小次郎大尉がのつて奮戦した誉の戦車が七日朝靖国神社に送られました。大尉が敵弾の中に、半身乗りだして指揮した鉄塔はじめ、全身に数知れぬ弾痕を見せながら板橋兵器本廠から牽引車にひかれ、道々の歓呼を浴びて来たのです。この戦車は十五日までここに陳列されます。八日には熊本から上京した西住大尉のお母さんと妹の孝子さんが、この戦車となつかしい対面をしました。

この戦車は、東京日日新聞社の主催、陸軍省後援で、三月、上野松坂屋で開催された「西住大尉展覧会」でも展示された。三月八日(水・第七六五号)の「東日小学生新聞」は、「大尉を慕ふ小学生の見物で大賑ひ」の様子を写真と共に掲載した。また、「東日小学生新聞」はこの日から久米正雄作「少年物語 西住戦車長」の連載を開始、三月二十九日(水・第七八三号)には、「西住大尉展覧会」を見た一年男子の「綴方」「ニジズミセンシヤ」を掲載した。

このほかにも、「東日小学生新聞」には、「昭和の軍神 西住小次郎大尉」についての記事が掲載された。

まず、一月二十日(金)には「軍神のお母さんから小学生の皆様へ」の記事が第一面に掲載され、一月二十七日(金)には北原白秋の「西住戦車長の歌」が第一面に掲載された。更に一月二十九日(日)には、第一面に枠囲いで西条八十の五行四連の詩「昭和の軍神」が掲げられた。

「光栄ある武士の柩ぞ」と、

君が微笑み愛撫せし

戦車は残る九段坂、

さざむ千余の弾痕を

眺めて誰か泣かざらん

第四連であるが、内容は一月十日の「武勲の戦車、靖国神社へ」に取材したものであろう。この枠囲いの詩の隣には、同じ第一面に「西住戦車長」の童話会 桐生市の四校で大盛會」の記事がある。

二月七日(火・第七四〇号)の記事は、「西住神社を建立 熊本と東京に銅像 母校には胸像や記念館」。出身地「熊本県では、この度西住大尉顕彰会を組織、故大尉戦死一周年記念日の五月十七日から記念事業にとりかゝることになりました」。

また、三月十四日(火・第七七〇号)には、「この度の事変の論功

行賞、陸軍第八回、海軍第七回分」の発表が報じられたが、その見出しは「西住戦車長も殊勲甲 行賞に輝く三千六百三十五人」とされた。沼津市第四校四年男子の作品「戦車」(二月十二日)と「西住戦車長」を関連付けようとするものではない。だが、これらの記事は、一種の「昭和の軍神」キャンペーンとでもいえるものではないであろうか。そうであるとすれば、戦車を校庭に乗り入れたことの意図にも自ずと察しはつくというもの。憶測だ、といえればそれまでのことではあるが。

日曜日以外に掲載された「詩」のうち、「戦時下」故の作品には、「おもん」会で涙をながした兵を見て、「私も泣きたかつた」という「兵隊さん」(茨城県日立第四校三年女子、一月二十一日・土、第七二六号)、作り物の「タンク」や「軍かん」の登場する「提灯行列」(茨城県日立第四校三年女子、二月二十四日・金、第七五五号)、「ものすごい砲声、見物人が大勢見てゐる」という「演習」(茨城県多賀郡坂上校六年男子、三月一日・水、第七五九号)、馬が野砲を引き兵隊が行進して行くという「兵隊」(茨城県日立第二校高一男子、三月二十八日・火、第七八二号)や「ともに手をとり日・独・伊、平和のために進みます」という「子供行進歌」(東京女子師範附属校四年女子、三月三十一日・第七八五号)などがある。

これらは、いわば眺める「戦時下」といえようが、児童の身近にある「戦時下」の作品には、「戦地の兄が元気で働きますやう、三日月様にお祈りした」とする「三日月様」(山形県掘田第一校五年女子、一月二十七日・金、第七三一号)、「三点星は北満の野でも見えると、兄さんからの、便りにあつた」という「三点星」(船橋市八栄校五年男子、三月十八日・土、第七七〇号)、「ち、はるで正月をむかへたをぢさんは、元気で強い兵隊さん」にはじまる「をぢさんへ」(北海道野花南校二年女子、三月二十九日・水、第七八三号)などのほか、「お父さまおめでたう」(横須賀市豊島校四年女子、三月二日・木、第七六七号)がある。

海南島の戦に
万歳の声ひかせて
新聞見たらお父さまが
にこ／＼笑つてる、
元気なお顔で笑つてる

「昭和十三年秋以降対支処理方策」(昭和十三年十二月六日)において「漢口広東攻略ヲ以テ武力行使ニ一期ヲ画シ」(前述)とした後の軍事作戦の一端がここに見られる。十四年一月十三日、「御前会議で海南島攻略が決定」(『昭和5』前出)され、二月十日「第五艦隊の援護下に第四根拠地隊・台湾混成旅団など、海南島北部に上陸」し、ほとんど抵抗を受けずに成功したという(同前)。「東日小学生新聞」では、二月十一日(土・第七四四号)の一面で「陸海軍の精鋭 海南島に上陸」と報じた。

「詩」作品においても、日曜日掲載分の作品ではなく、それ以外の曜日において時局を反映した作品が少なからず見られた。だが、内容的に、児童の身近な者の戦死や「おこつ迎へ」の作品が見られなかったのは救いといえよう。

「短歌」は、合計一首。内訳を以下に挙げる。

しつとりと霧にひたれる校庭を影の如く友来りけり

(岩手県川口校高一男子、二月十二日・第七四五号)

国の為命を捨てる日本人胸にひめたる大和魂

(葛飾区保土ヶケ校六年男子、同右)

此の机思ひ出せば長かりし六年の月日我と親しむ

(宮城気仙沼校六年男子、同右)

静かな冬の夜外ではちら／＼雪の降りて家ではちん／＼お湯の音

かな (北海道大沢校五年男子、同右)

木の葉落ち裸になつたポプラの木もの淋しげに寒空をさす

飛行機の音に飛出し空見ればほつかり浮ぶ白雲の影 (岩手県藤沢校高一男子、同右)

雪だるま黒い目玉に八字ひげわけもないのにきみるかな

兵士らの出でゆく毎に思ふなりわが身役立つ時はいつかと (埼玉県那珂校六年女子、同右)

朝早く起出て見れば軒下に干菜にさびしく霜下りてみゆ

朝日さす国に生れし喜びをさらに知りけり初春の朝 (郡山市金透校五年女子、同右)

風強く吹雪を敵と戦ひて家に帰るは難儀なりけり

(長野県池田校高一女子、三月五日・第七六三号)

(秋田県小坂元山校高一男子、同右)

「戦時下」を内容とするものは、「国の為」「兵士らの」の二作品。

「短歌」そのものの掲載も多くはないが、「戦時下」を内容とする作品

も多くはない。この二首にしても、前年第四四半期にみられた「靖国

の宮」や「遺骨迎ふる停車場」などは見えない。また、「静かな」は

破調であるが、こうした作品に出会うと、作者の年相応との思いがあ

り、ほつとさせられる。「雪だるま」は巧まぬユーモアがいい。

「戦時下」を内容とする作品で、日曜日以外の掲載には、次のよう

な作品がある。

今日も又駅の前では出征の兵士見送る人の黒山

(埼玉高階校高一男子、一月十七日・火、第七二二号)

出征の発車のベルは鳴りだしぬ歓呼の声の高まりてゆく

(長野県松尾校六年男子、一月三十一日・火、第七三四号)

非常時に米の豊作神かけて我が村人の祈る心よ

(福島長瀬校高一女子、二月一日・水、第七三五号)

凱旋の勇士迎えて今更に感謝の心わき出づるかな

(大森区新井校六年男子、二月一日・水、第七三五号)

支那事変今年で丁度三年目我らの務もなほ重くなる

(新潟名木野校五年男子、二月十六日・木、第七四八号)

出征の兵士を思へば寒いとも思わざりけり今日の日にて

(仙台連坊小路校六年男子、二月二十二日・水、第七五三三号)

帰らぬと旗に送られ前線へ向かひし時の叔父の面影

(群馬県藤岡校六年男子、二月二十五日・土、第七五六号)

我もまた銃後の一人とこしえの平和の為に力つくさん

(北海道奈井江校高一男子、三月二十一日・火、第七七六号)

以上、八首。この第一四半期における日曜以外の「短歌」の掲載数

は二八首。

第一首、「今日も又」と第二首「出征の」は、いうまでもなく出征

の兵士の見送り風景を詠んだもの。この出征見送りが何時のことであ

るか特定できないが、第一四半期に掲載されたほかの作品の内容は

初冬から卒業が間近いというものであったから、これらは前年第

四四半期の後半からこの第一四半期三月前後にかけて投稿した作品が

掲載されたと推測できる。

この推測からすれば、第一首、「今日も又」と第二首「出征の」は、

その掲載月日から、前年の昭和十三年第四四半期の後半から十四年一

月以前の投稿と推測でき、また、投稿作品を詠んだ時期とそれを投稿

した時期とが大幅に時間差があるとは考えにくいので、この歌を詠む

ことになった出征兵士の見送り体験は、投稿時期とそれほど時間差の

ない頃と推測できよう。

出征見送りの時期は特定できないが、昭和十三年十二月六日の「漢

口広東攻略ヲ以テ武力行使ニ一期ヲ画シ」とする「昭和十三年秋以降

対支処理方策」の決定に重なる時期を始点とし、十四年一月までの期間と推測出来よう。つまり、「武力行使二期ヲ画シ」とする「方策」であっても、兵士の大陸への出征は行われ、その度に児童は見送りの列に加わったということであろう。

第三首目「非常時の」は、「綴方」の項で検討した。

第四首、「凱旋の勇士迎えて」は、出征するものあれば凱旋するものもあったということ。「漢口広東攻略」作戦以後の比較的落ちついた戦況によるものであったのだろうか。

また、第七首「帰らぬと」は、戦地にある叔父の安否を気遣ったものか。「凱旋」したものであつたか。出征するものがあれば凱旋するものがあり、戦いが終わったわけではないので、当然、戦地に置かれていたものもあるということ。

第五首「支那事変」と六首「出征の兵士」は、「銃後」にある児童たちに求められた覚悟と忍耐。「支那事変今年で丁度三年目」と、長期化した戦況のもと、児童たちにはいよいよその担うべき役割が強調され、精神的な我慢が強要されるようになったというべきであろう。「我もまた銃後の一人とこしえの平和の為に力つくさん」は、この戦争の目的が、「とこしえの平和の為」であると児童たちに教え込まれていたということであろう。

「俳句」は、「展開」の項で確認したように、検討対象の全九回の日曜日のうち、二月十二日に三句のみの掲載。

大雪にさびしく見ゆる柳の木

(北海道幾寅校六年男子、二月十二日・第七四五号)

正月や鈴の音高く馬櫓は行く

(北海道岩見沢校高二男子、同右)

古がねをためて嬉しや国のため

(新潟大島第二校四年女子、同右)

前の二句は、生活詠。第三句が「戦時下」を内容とするもの。「古がね」集めは、昭和十二年(一九三七)八月の「国民精神総動員実践事項」の目標項目「資源ノ愛護」に関する「実践細目」の3「廃品ノ蒐集提供」の実践として国民に児童に要請された。その一端は、べいごまで砲弾を作ろうと東京麻布区の小学生が回収運動を行ったりした。日曜日における「俳句」の掲載は、十四年第一四半期に至っては激減したと言わざるを得ないが、日曜以外の掲載では、この第一四半期に八五句ある。たまたま日曜の掲載が少なかったということであろう。この八五句のうち、「戦時下」を内容とするものは次のような作品である。

一草刈るに鎌光り銃後なほ堅し

(静岡県興進校六年女子、一月六日・金、第七一三号)

年の暮白衣の勇士羽根をつく

(足立区千寿校二男子、同右)

戦勝や大陸照らす初日の出

(横浜市市場校六年男子、一月二十一日・土、第七二六号)

初日の出は武運を祈るかな

(樺太落合第二校六年男子、二月四日・土、第七三八号)

凱旋兵星がふえて肩重し

(高崎市中央校高二男子、二月九日・木、第七四二号)

戦線の寒さをしのぶ帰還兵

(茨城県銚田校六年男子、二月十六日・木、第七四八号)

寒い夜に戦地だよりを読返す

(茨城県銚田校六年男子、同右。ただし、別人)

戦線の将士を思ふにぎり飯

(芝区慶応幼稚舎六年男子、二月十七日・金、第七四九号)

ろりりばた軍事郵便母がよむ

(茨城県若松東校六年男子、二月二十三日・木、第七五四号)

靖国の御霊となりて今はなし

(仙台市立町校六年男子、三月八日・水、第七六五号)

第一句の掲載は、一月六日の第四面であるが、この面の欄外上部にある曜日と通巻号に誤植があり、ここでは正しい曜日、通巻号を示した。

日曜日掲載の三句とともにほとんどの作品には、深刻な「戦時下」は詠み込まれていないといえるだろう。確かに、第二句「白衣の勇士」となったのは戦場でのことが大半であろうが、暮に「羽根をつく」までに回復している様子に視点があり、深刻さはない。

作品内容は「短歌」の位相とほぼ重なりといえよう。「短歌」には見られた「出征」の光景はないものの、「凱旋兵」「帰還兵」がおり、戦場にいる肉親からの「軍事郵便」が届き、その戦場での兵士を思っ

て自分の日常の戒めとしている。
だが、第十句「靖国の御霊となりて今はなし」には、「戦場」がこの句を詠んだ児童に繋がっている。「御霊」となってしまったのが、この句を詠んだ児童とどのような縁戚にあるのかは詳らかではないが、一般的な作句というより、具体的な存在を思わせる作品ではなからうか。

従って、この第十句のほかは、「漢口広東攻略ヲ以テ武力行使ニ二期ヲ画シ」とする時局を反映したのか、比較的落ちついた作品内容であったといえよう。

四 昭和十四年第一四半期における「書方」「図画」とこの期の概括

「書方」三六作品を検討する。字句において、時局的なものは「満洲帝國萬歳」の一作品のみ。同じ字句での作品は、六年生の「千鳥破風亂舞」「日本刀大和魂」がそれぞれ二作品ずつのみ。直前の十三年第四四半期に四作品もみられた六年生の「法隆寺五重塔」は一作品も

見えない。

平日に掲載された作品で時局を反映したと思われる字句は、「戦争軍旗大砲」が二作品、「東亞一新の春」「防火防空」がそれぞれ一作品ずつ掲載された。この第一四半期には合計で一七八作品が掲載されており、時局柄の字句を作品とした割合は少ない。

なお、字句は九三種にわたり、多く見られる字句は「大内山松の緑」(五年)と「千鳥破風亂舞」(六年)がそれぞれ七作品、「梅ばち天神様」(三年)「乃木大將旅順開城」(五年)「遺物國寶史蹟」(六年)「征馬不前人不語金州城外立斜陽」(高二)「泰山不讓土壤河海不擇細流」(高一)がそれぞれ五作品見られる。

この第一四半期における「書方」の字句には、「戦時下」故の傾向は顕著ではなかったといつてよからう。

「図画」は、合計一三作品。日曜日毎の「図画」作品の掲載は、前年の昭和十三年では第一四半期から第四四半期に経過するにつれて、減少して行ったが、減少傾向はこの第一四半期でも同様であり、掲載作品数のみならず、掲載機会も月一回ずつの合計三回に過ぎなかった。

一三作品のうち図柄に時局を描いたものは、「戦車と戦闘機」「戦争ごっこ」がそれぞれ一点ずつ。ほかの絵柄は、風景画として海岸や田園を描いたものや稲刈りを描いた作品など。また、「本とノート」「バスケットボール」「鉄ビン」のそれぞれのスケッチがある。

日曜以外の、平日に掲載された「図画」は、六八作品。このうち、時局柄と推察される図柄には、山を登って行く日の丸を立てた戦車の作品とやはり日の丸を付けた戦車が落葉した林を行く作品、更に戦場であろうか狙撃兵と斥候兵が描かれた作品などがある。しかし、これらは合計で四作品であり、作品数からは多くはない。

平日掲載の「図画」で多かった絵柄は、家を描いた作品が一二、山と家のある風景画が五作品。また、第一四半期という時節柄によるものであろうが、「羽根つき」「凧あげ」「初日の出参拝」「獅子舞」「餅つき」「スキー場」なども画題となっていた。静物のスケッチも多く、

洋酒ビンを描いたものが三作品のほか、ヤカン、手提げカバン、水差し等様々描かれた。平日掲載の作品についても、多くは児童の生活風景にある図柄であり、「戦時下」故の作品は少なかつたといえよう。

以上、昭和十四年（一九三九）第一四半期の、一、二、三月の「児童文化」について、その位相と展開について検討してきた。

昭和十四年第一四半期における作品展開を直前期である十三年第四四半期と比較してみると、「欄」の設定は同じ二回であるのに、掲載作品数では「詩」作品以外はすべて減少していたが、原因は作品の長さではなからう。それは、十三年第四四半期の検討対象が一三週あるのに対して、十四年の第一四半期は、前述したように九週しかないということである。検討対象の一三週のうち、一月一日のマイクログ資料へ欠け及び「欄」の設定のみならず作品の掲載さえもない週が三回もあったことが、掲載作品数の減少をもたらしたと考えてみたい。

こうした「欄」の設定のみならず作品の掲載さえもない編集意図については、推測の域をこえるものではないが、平日における作品掲載が定着し、日曜日ごとに「欄」を設定する必要がなくなったことが挙げられようか。事実、平日に掲載された作品数は決して少なくはなかつたのである。

内容的には、掲載された「児童文化」の各作品は、この年第一四半期では、「戦時下」故の作品は少なかつたといえる。このことは、戦況が「昭和十三年秋以降対支処理方策」を受けのことと関係していると考えてよからう。

だが、「あこつ迎へ」の「綴方」が掲載されたということは、こうした「漢口広東攻略」作戦の結果の「あこつ迎へ」が各地で行われたであろうことを推測させる。児童は、出征の見送り、帰還の出迎え、遺骨迎えにと、その都度、整列させられた。時には、当然、遺族として行進の列に加わざるを得なかつたことでもあろう。

「詩」では、時局柄を反映したのものとしては、「戦車」のみであり、

それ以外は児童の日常的な身辺風景が題材となっている。日曜日掲載以外の作品に時局を反映した作品が少なからず見られたが、児童の身近な者の戦死や「あこつ迎へ」の作品が見られなかつた。「短歌」でも「戦時下」を内容とするものの掲載は多くなかつた。この第一四半期では、前年第四四半期にみられた「靖国の宮」や「遺骨迎ふる停車場」などは見えない。

「俳句」の日曜掲載は、極端に少なく、平日掲載の作品も検討の対象とせざるを得なかつた。これらには、「短歌」には見られた「出征」の光景はないものの、「凱旋兵」「帰還兵」がおり、戦場にいる肉親からの「軍事郵便」が届き、その戦場での兵士を思つて自分の日常の戒めとしている作品が掲載された。しかし、この場合も「短歌」の位相とはほぼ重なり、「戦時下」を内容とするものの掲載は多くなかつたといえよう。

「書方」「図画」についても、同様。日曜と平日に掲載された作品を合わせて検討してみても「戦時下」を内容とする作品の掲載は多くはなかつた。

すなわち、この昭和十四年第一四半期での「戦時下」における児童文化は、その戦況を背景に比較的「戦時下」の色彩が濃くない展開を見せたといえよう。だが、三月に掲載された「あこつ迎へ」が気懸かりだ。「漢口広東攻略」作戦の整理が進む事によつて、児童たちには度々の「あこつ迎へ」が待っているのではなからうか。

（一九三九・一一・三〇）